

◇◆慶應義塾大学大学院経営管理研究科(ビジネススクール)  
「実践的授業方法について考える」ニュースレター(第22号・2008/10/31)◆◇

ニュースレターの第22号をお送りします。今月は東京海洋大学名誉教授・同大学院海洋科学技術研究科特任教授 渡辺尚彦先生の実践的授業取組の最終回をお届けします。今月は、渡辺先生をはじめとする東京海洋大学のケースメソッド授業取組が現在どのように結実しているかをご紹介します。

\*\*\*コンテンツ\*\*\*

本号のお知らせ  
(イベント情報などをご案内します)

実践的授業法取組紹介  
(実践教育に鋭意取り組まれている先生方の手記を掲載しています)

ショートエッセー  
(実践的授業方法に関するエッセーを掲載しています)

□■□本号のお知らせ.....

慶應義塾大学大学院経営管理研究科ケースメソッド授業法研究普及室では今年度の後半に、ケースメソッド授業の実践に関する研究集会とシンポジウムを計画しています。詳細が決まり次第、このニュースレターでご案内いたします。

.....

慶應義塾大学ビジネススクールのホームページからニュースレターのバックナンバーがご覧いただけます。こちらからどうぞ。

↓

[http://www.kbs.keio.ac.jp/gp/gp\\_news.html](http://www.kbs.keio.ac.jp/gp/gp_news.html)

.....□■□

□■□実践的授業法取組紹介.....

このコーナーでは、大学教員による実践的授業方法への先存取組を「私の履歴書」風に紹介してまいります。今月は食品流通安全の領域での実践的教育でご活躍されている東京海洋大学の渡辺尚彦先生の最終回をお送りします。

～海洋大でのケースメソッド～

東京海洋大学大学院海洋科学技術研究科  
大学院教育改革プログラムコーディネータ  
特任教授 渡辺尚彦

#### 【第4回】両輪を一回転させる

私がケースメソッドと出会う契機となった現代 GP「食品流通安全管理の高度職業人養成」プログラムは、2007 年 4 月、社会人を主たる対象とする修士課程「食品流通安全管理専攻」の開設に帰結した。

この専攻では平日の夜間と土曜日に授業を行い、すべての科目が短期集中開講で、内容も知識を学ぶ講義授業だけでなく、問題発掘力・解決策定力・決断力を養うためのものとして、ケースメソッド授業による演習科目を目玉に据えている。

諸事情により定員が 8 名と少ないのであるが、さまざまな業種から課長・部長職にある者を含めて 20 代から 60 代の幅広い年齢構成で学生が集まった。また、研究者養成を目的とした従前の専攻の若い学生もこの専攻の授業を履修できるので、総勢 20 名を超える人数で、多様な年代、経歴の参加者によって活発な討論がなされている

私はこの専攻の演習授業用に、BSE に関する 2 本のケース教材：

- ・BSE(なぜ日本では全頭検査をやるのか)
- ・米国産牛肉はどれくらい危険なのですか？

を作成した。このケースでは検査をすることと安全性を確保することの違いが混同されているという問題を、実際にリスク計算することで確かめるといった内容を含んでいる。クラス討論の場では、黒板を使って計算方法について相互に疑問を出し合って学んだ。

ここで少し話題が変わるが、東京海洋大では学内の 16 研究グループが参加して、海産食品の安全に関するプロジェクトを行っている。このプロジェクトの主査を務めていた私は、年度末のプロジェクト成果発表会(2008 年 3 月)で討論会(シンポジウム)実施したいと考えた。従来のように各グループの研究発表をただでなく、若手研究者が食品のリスクに関する視野を広げ、食品のリスク研究の全体像の中で自分の研究の置かれている位置を掴めるようにしたかったのだ。

プロジェクト研究を担っている大学院生・ポスドク研究者 30 名が相互に話し合うにはどうすべきかと自問したら、答えは自ずと「ケースメソッドを使う」ことになった。このころ、ケースを書くことへの「重しが取れて身軽」になっていた私は、余勢を駆って、八つあん・熊さん・大家さんが登場するケース教材(A4判 7 ページ)、海産食品の何がどれくらい安全でないのか？を書いて、シンポジウムの 1 週間前に討論参加者(各研究グループから 2 名)に配布した。

シンポジウムの当日の午前中にグループ討論を行い、午後からのシンポジウム本番の中で、聴衆の前で「クラス討論」の形式で 30 名の討論会を行った。グループ討論は活発に行われ、更にクラス討論(全体討論)も、2 枚のホワイトボードを使った板書は窮屈を極めたが、どんどん意見が出て見掛けは立派に行われた。ケースメソッド授業に慣れていた学生が、今回の討論に 10 名以上参加していたことが幸いしたと思われる。

全体討論会の聴衆はほとんどケースメソッドは初めての人たちばかりで、「とても良かった」という感想も寄せられたのであるが、残念ながら、私としては大失敗であった。私のディスカッションリードが強引に話題を引き回したし、討論が深まるポイントを探しあぐねて終わったからである。

失敗の原因の一つは、ディスカッションをリードする私の、事前の討論主題の絞込みがオロソカだったことである。食品の安全について全体像を俯瞰することが「社会技術研究の手法」の常道であると考え、これを討論主題にしたわけであるが、この手法を形式的に使っただけで、論点を十分に掘り下げてはいなかった。そのことに気づいたのである。改めて論点を検討していくうちに、今度は、議論が深まらない原因の一端はケースの構成や記述内容にあることに気づいた。

こうした気づきを重ねていくうちに、「ケースで教えるということは、討論主題を深耕し、それに合わせてケースの構成と記述を練り、実際に討議をしてみて、ケースを見直し、改訂することの繰り返しなのだ」という理解に至った。まさに竹内伸一先生が「ケース教材の開発とディスカッション運営技術の獲得・向上が車の両輪であり、初心者にとって『早く一回転させる』ことが肝要」と仰る通りの道であった。

さて、ここまで4回にわたって、4年前に初めてケースメソッドに出会った私が、この授業方法への理解をどのように深め、実践に結び付けて行ったのかというお話をさせていただいた。最後に、東京海洋大で行われているケースメソッド授業の様子を簡単にご紹介しよう。

食品流通安全管理専攻では小川美香子氏が「キューピー株式会社」（パート主体の食品製造現場での事故防止に2次元バーコードを応用した成功例）、「コープさっぽろ」（POS データを取引先にオープンにしたことで組織内外の知恵を集めることに成功した）などのケースを作成して授業をされている。

また、学部2年生用の海洋政策文化学研究法という科目では3人の教員によるケースメソッド授業が行われている。まず、池田玲子氏が学生に身近な自分たちの問題のケースを作ってケースメソッド授業の導入を図り、次いで川辺みどり氏が日本国内の海洋問題（イルカ漁）、稲本守氏が国際的な海洋の話題（捕鯨問題）を扱っている。内容の難易度を次第に上げていくことで、学生の視野も広がっていくように工夫されている。

全部がかならずしもケースメソッドそのものとはいえない「変形ケースメソッド」になっているが、議論をすることに慣れていない学部生を対象とした授業として成功している。この他にもケースメソッドを使った授業がいくつか展開されており、今後も増えていくと思われる。

..... □ ■ □

□ ■ □ 実践的授業方法ショートエッセー.....

このコーナーでは、実践的授業法取組で紹介した内容を、ショートエッセイ形式で解説しています。

## 第21回

ケース教材を磨く・ディスカッション運営技術を磨く

このニューズレターでは、実践教育取組を紹介して下さる先生のエッセイに、その内容に対する筆者の捉え方を綴り、筆者からのエッセイとしてお返しすることを繰り返している。両者とも文面は相手に向けて書くのではなく、このニューズレターの購読者が読み手であることを意識してはいるが、読者からは、二人が文通しているようにも見えるかもしれない。

渡辺先生のシリーズでは、第2回で「ケース教材の開発とディスカッション運営技術の獲得・向上が車の両輪であり、これを『早く一回転させる』ことが重要」ということに筆者が触れた。渡辺先生はこれに共感して下さったようで、最終回で改めてご自分の歩みをこのことに重ねて下さった。

「ケース教材を書くのがラクになって、どんどん書いたのだけれど、それをういて行ったディスカッション授業は、必ずしもうまくは動かなかった」という趣旨の渡辺先生の記述を受けて、筆者のエッセイもそこから始めることにしたい。そうすることで、「ケース教材」と「ディスカッション運営技術」の両輪を回すことの必要性とその意味について、少し詳しく述べようと思う。

前々回に書いたことの繰り返しになるが、ケース教材の基本機能は、「ディスカッションの誘発剤」「講師がしたい議論の導火線」「その日の学習目標に向けた発射台」である。このようにケース教材は、ディスカッションの論点、その先にある教育目標と緊密な関係を持っている必要がある。

筆者の考えでは、「ケース教材の記述」「誘発されるディスカッションの論点」「その先にある教育目標の実現プロセス」の3者間の関係は、一気に作れるものではなく、ある程度の時間をかけながら、少しずつ作り込んでいくものである。これは、新型の自動車がロードテストを重ねて開発され、市販されているのと同じことだ。

車は路上を走るものであり、路上でどのような乗り心地になるか、急ブレーキ時や急ハンドル時に車体がどのような挙動を見せるか、テストドライバーと開発者は路上テストに莫大な時間を費やす。こうした努力の積み重ねにより、新型車は開発者が狙った性能や運動特性を得ていくのである。

これと同じく、ケース教材はディスカッション授業の教室で生かされるものなのだから、現在のケースの記述が教室でどんなディスカッションを導くのか、参加者をミスリードしている表現箇所はどこか、ケース作成者の思い込みの強さがディスカッションにマイナスに作用していないか、を確認しながら、磨いていかなければならない。ところが、この作業の優先順位は通常なかなか上がらない。それはどうしてだろうか。

ケース教材の作成は、一義的には「もの書き作業」なので、外注も可能であり、お金と人手をかければ短期間で大量生産も不可能ではない。また、そのような仕事を欲している人も、それが得意だという人も、ディスカッション授業が運営できる人の数に比べれば明らかに多いので、ケース開発のスケジュールがタイトであればあるほど、ライター任せになりやすい。

ディスカッションリーダー自身がケース教材を書く場合であっても、慣れないうちは、自分の頭の中に広がっている討議世界を半ば独善的に押し通した作品になりやすい。その点では、教える本人が書いたとしても、書き終わってすぐの状態で「参加者のための教材」になっているとは限らない。実際問題、研究と教育と学事に追われて多忙な大学教員は、授業日のぎりぎりになって最低限の内容でケースが書き上がるということも多いだろう。

また、討議用ケースとして書き始めたものの、ディスカッション授業に使ってみたらあまりうまく討議が誘発され

なかったのが、事例研究ケースとして仕上げてしまい、そのケースをもとにインタラクティブにレクチャーする授業に帰結した、ということもあるだろう。これは明らかに目標の未達なのだが、周囲からはそのようには見えにくいから、このような事態もしばしば生じる。

討議用のケース教材としての完成度を高めるために必要な作業が十分に行われずに、ケース作成が進んでしまう典型的な状況を書き出してみたが、「わが身に当てはまる」という人も実は多いのではないか。

東京海洋大学では、渡辺先生の報告にもあったように、数多くの先生がケースメソッド授業を実践するようになり、一個人の取組を超えて、専攻を挙げての授業方法として確立しつつある。その過程では、「ケース教材」と「ディスカッション運営技術」の両輪が、複数の先生方の手によって、何回転もしたことが明らかである。4回に渡って本事例に触れていただいた読者にはそのことを読み落として欲しくないと、筆者は願っている。

渡辺先生の事例から筆者自身が改めて感じたことは、やはり、「既存のケースでまずは教えてみる」べきで、「教える前にケースを書く」のはあまりよくない、ということである。「ケースで教えるとはどのようなことか」を早期に理解することが重要なのだが、実践現場では「ケースをどう書くか」に意識がいきまわってしまいがちなことも再認識できた。ケースメソッド教育をプレゼンテーションする側の立場にいる筆者らの、これからの仕事のあり方がまた少し見えてきた。渡辺先生に感謝したい。

筆者自身、3週間後に試運転を控えているケース教材を抱えている。幸いにして、同じ日に2回授業を行うことができるので、できればその一日で4回転くらいさせたいと思っている。

#### 追記

文中に出てくる「討議用ケース」「事例研究ケース」については、日本ケースセンターのウェブサイトには詳しい情報がありますので、ご参照ください

[https://www.casecenter.jp/index.php?\\_module=public&\\_action=whats12](https://www.casecenter.jp/index.php?_module=public&_action=whats12)

（文章 竹内伸一）

.....□■□

このメールマガジンは毎月1回発信しております。

.....

#### ○お問い合わせ先

慶應義塾大学大学院経営管理研究科  
ケースメソッド授業法研究普及室（高木晴夫研究室内）

[kbsnewsletter@info.keio.ac.jp](mailto:kbsnewsletter@info.keio.ac.jp)

#### ○慶應義塾大学大学院 経営管理研究科ウェブサイト

<http://www.kbs.keio.ac.jp/>

#### ○慶應義塾大学大学院 経営管理研究科 文科省特色GP事業ウェブサイト

<http://www.kbs.keio.ac.jp/gp/index.html>

.....

発行者 高木晴夫

編集者 竹内伸一、住吉みどり、河井純子

次号（第23号）は2008/11/28にお届けする予定です。

ご意見、ご感想、購読者のご紹介は [kbsnewsletter@info.keio.ac.jp](mailto:kbsnewsletter@info.keio.ac.jp) 宛に、また、メール送信先の変更を希望される方、購読を希望されない方、購読を中止したい方は、お手数ですが [kbsnewsletter@info.keio.ac.jp](mailto:kbsnewsletter@info.keio.ac.jp) までご一報ください。次号発信日の前日までのご連絡に対応させていただきます。

当メールマガジンの内容を転載する場合は、ご一報ください。